

都市開発や森林伐採などの環境破壊と地球温暖化により、行き場を失った野生動物と人間の接触する機会の増加が、全世界を脅かす伝染病の発生の温床となり、そして経済のグローバル化による人と物の移動の急激な伸びが、病原体を地球上に撒き散らし未知の感染症の大流行を引き起こす。

世界を震撼させている新型コロナウイルス(COVID-19)は、2019年12月に中国の武漢で発生した。中国国内の限局的流行となると考えられていたが、感染情報の隠蔽や「封じ込め」の遅れにより、瞬く間に日本やヨーロッパ、アメリカと全世界に感染が広

新型コロナウイルスの世界的流行

— ウイルスと人間との共存 —

情報広報部副部長 山科 賢児

がり、世界保健機関(WHO)は2020年3月11日に新型コロナウイルスの感染拡大が人間社会に破滅的な影響を及ぼすとして「パンデミック」と宣言した。

ウイルスの感染力は、インフルエンザやSARS(重症急性呼吸器症候群)コロナウイルス(2002年)とほぼ同等とされ、致死率は意外に低く約2%とされる。感染者の8割程度は軽症や無症状であるが感染力を持つため、高齢者や基礎疾患を持つ人が重症感染の犠牲になってしまう。軽症者や不顕性感染者の対処が感染の拡大や医療崩壊の防止のために急務となっている。

ウイルス感染の世界的拡大による社会の機能不全や麻痺は、心と体に多大なダメージを与え、今まで人類が築き上げてきた文明や価値観を根底から揺るがそうとしている。ミサイル攻撃は一瞬にしてインフラを破壊し人命を奪う一方、ウイルス感染による死は、じわじわと人々を不安と恐怖に陥れ無慈悲でさえある。新型コロナウイルスはまるで精巧な生物兵器であり、攻撃の標的は、宿主を容易に手に入れられる人口密度が高く現代文明の恩恵を受けている大都市、ニューヨークやパリやロンドンそれに東京となっている。

欧米の医療現場のベッドに瀕死の状態でも横たわっている多くの重症感染者や、葬儀らしい葬儀もできず埋葬される死者の姿を見ると、まるで戦争映画の野戦病院の光景を見ようである。人影のない静まり返った大都市の街並みは核戦争が起こった後の廃墟を撮ったSF映画のワンシーンを想像させる。

ウイルス感染対策に、微量のDNA断片を増幅してウイルスを検出するPCR検査の徹底による感染者の隔離や都市封鎖の手法をとる国が多い中、日本は「クラスター対策」という独自の方法を採用した。集団発生(クラスター)を早期に発見し新たな集団発生を封じ込めて、重症感染者に医療資源を注ぎ医療崩壊を回避する戦略だが、とても労力がある方法である。

集団の、ある一定の割合が感染して集団免

疫を獲得すれば、ウイルスと人間との力関係は平衡状態となりウイルスの流行は終わる。当初イギリスは集団免疫の戦略を取り入れたが、感染者や死亡者の急増が起り感染拡大の速度と感染のピークを抑えるため、個人の行動を制限し不要の外出や接触を控える「社会的距離戦略」と国家戦略として「都市封鎖」に踏み切った。

4月7日、日本では大都市の感染者の増加を受け新型コロナウイルス対応の特別措置法に基づく緊急事態宣言が出され、東京や大阪など7都府県は外出自粛の要請などの措置が取られた。措置の内容は欧米とは異なり曖昧で緩やかであり、人々の自粛と我慢と「同調圧力」に期待するところが多い。ただ日本の死亡率は今までのところ他国に比べ驚くべき程低く、日本人はすでに何らかの形でウイルスへの抵抗力(自然免疫や集団免疫)を獲得している可能性がある。しかし今はあらゆる手段を使って感染者数と感染の広がる速度を遅らせることが第一である。

人間もウイルスも数十億年の間、お互い進化してきた自然界の一存在に過ぎない。ウイルスにとって宿主の死は自らの死を意味し、宿主の人間を失えばウイルスの繁栄は期待できない。この新型コロナウイルスは、特に生物学的適応戦略に長けている厄介な物質であり生命体でもあり、一筋縄ではいかない。新型コロナウイルスのパンデミックの終息には、科学の力による「ウイルスの撲滅」は恐らく根本的解決ではなく、ウイルスの弱毒化や集団免疫などによって地球上に「ウイルスと人間が共存」し、互いにとって程よい生態系を構築する戦略が、理にかなっている。

